



**Data**

監督: 山田火砂子

出演: 若村麻由美/山本耕史/賀来千香子/佐野史郎/綿引勝彦/渡辺梓/堀内正美/平泉成/山口馬木也/柄本明/小倉一郎/渡辺哲/斉藤とも子/磯村みどり/松木路子/神田さち子/神子彩/上野神楽

## 👁️👁️ みどころ

あなたはこの女性を知ってる？中国の女医第1号は、華流ドラマで描かれている明の時代の談允賢だが、日本のそれは、「埼玉県の三大偉人」の1人とされている荻野吟子。1868（明治元）年の1年前に17歳で嫁いだ吟子だったが、離婚して実家に戻ると、再び医学への夢が！允賢のように皇族との縁はなかったが、父親、友人、そして自分の力で一步一步難関をクリアし、ついに1885年、34歳で産婦人科荻野医院を開業！

13歳も年下の敬虔なキリスト教徒との結婚、理想郷イマヌエル開拓のための北海道への移住等、吟子の人生は波乱万丈だが、その生き方を文部科学省選定の本作でしっかり学びたい。その上でさらに、本作のメインタイトル「一粒の麦」の意味と意義もしっかり確認したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■映画は勉強！日本の女医第1号を本作で発見！■□■

私は今年87歳になったという女性監督・山田火砂子の名前は知っていたが、荻野吟子って一体ダレ？私を含めて多くの日本人はそんな女性の名前を知らなかったはずだ。また、石井筆子って一体ダレ？私は津田塾大学を創設した津田梅子は知っていたが、石井筆子は知らなかった。この石井筆子とは、その美貌と知性で「鹿鳴館の華」と呼ばれ、「滝乃川学園」という日本最初の知的障害児施設を守り、「日本の障害児教育の母」と呼ばれた女性だ。山田火砂子監督は、そんな石井筆子を『筆子・その愛—天使のピアノ—』（06年）で描いていた（『シネマ14』335頁）。また、山田火砂子監督は、『母 小林多喜二の母の物語』（17年）では、プロレタリア作家小林多喜二の母・小林セキに焦点をあてていた（『シネマ40』

未掲載)。

そんな山田火砂子監督が、「伝記もの映画」たる本作で取り上げたのは、日本の女医第1号になった荻野吟子。ちなみに、埼玉発の映画『翔んで埼玉』(19年)は自虐ネタ満載ながら(ために?)大ヒットしたそうだが、その埼玉県の「三大偉人」の一人とされている荻野吟子は、同作では何も触れられていないはず。それはきっと、同作のスタッフが埼玉県の三大偉人についての勉強が不十分だったためだろうが、私も本作ではじめてそんな荻野吟子を発見!まさに映画は勉強だ。

## ■□■中国では明の時代に女医第1号が!?!その比較は?■□■

1867年の大政奉還によって元号が慶応から明治に改められたが、その時荻野吟子(若村麻由美)は17歳。本作の冒頭は、「医学の勉強がしたいから嫁にはいかない」と主張する吟子の言い分が、父親・綾三郎(綿引勝彦)にも母親・かよ(磯村みどり)にも全く通用せず、名主の長男・稲村貫一郎の元に嫁いでいく姿から始まる。そこでの会話を聞いていると、徳川から明治に時代が移ったとはいえ、男尊女卑の思想は全く変わっていないことがよくわかる。したがって、女に学問は不要、女は嫁いで子供を産むのが仕事、という価値観が当然だったし、「嫁して3年、子なきは去れ」という考え方も当然だった。もちろん、「職業婦人」という言葉はまだ生まれていなかったし、女の医者などあり得ないことだった。

もっとも、西洋医学(産科)を学んだ女性としては、ドイツ人医師シーボルトの娘で「オランダおいね」の異名で呼ばれた楠本イネがいた(1827年-1903年)。また、吟子より約100年も前に、世界ではじめて全身麻酔を用いた手術(乳癌手術)を成功させたのが江戸時代の外科医・華岡青洲だが、彼がそれに成功できたのは、実母の於継と妻の妹背加恵が実験台になってくれたからだ。ちなみに、数回にわたる人体実験の末、於継の死・加恵の失明という大きな犠牲の上に、全身麻酔薬「通仙散」(別名、麻沸散-まふつさん)を完成させた物語は、増村保造監督の『華岡青洲の妻』(67年)で詳しく描かれているので、そのお勉強もしっかりと。

近時、中国の華流ドラマにこっている私が11月からずっと観ているのが『女医明妃伝~雪の日の誓い~』。これは、明の時代に中国の女医第1号になった女性・談允賢の物語だが、その時代の中国でも女の医者などあり得ないのが常識だったから、允賢が女医第1号になるについては、本作の吟子以上の試練が待ち受けていた。允賢の場合は、華流ドラマらしく(?)宮廷を舞台とした権力闘争と女の嫉妬争いが絡んでくるから、医学の勉強以外にその方面での努力が大変。それに比べると、本作にみる吟子の場合は真面目一辺倒が目立つが・・・。

## ■□■父の理解、友人の支援、そして吟子の行動力に注目!■□■

吟子の父親がかなり進歩的な考えの持ち主であったことは、夫から性病をうつされ子供を産めない身体になって離婚され実家に戻された時点で、ハッキリわかる。つまり、あの時（嫁ぐとき）は「お前の理想はまだ早い」と言っていた父親だったが、実家に戻った吟子が、「この時治療にあたった医師が全て男性で、女医となって同じ羞恥に苦しむ女性を救いたいと女医を志した」ことを話すと、父親はそれを了解したばかりか、東京にいる医師・井上頼圀（佐野史郎）への入門の世話までしてくれたからえらい。さらに、吟子を支援したのが、吟子以上に男女差別を嫌い進歩的な考え方を身につけていた友人の女性・松本荻江（賀来千香子）。東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）の教師になっていた荻江は、井上塾を卒業しながら田舎の学校の先生に収まっていた吟子に対して、その第一期生として入学し、さらに勉強することを勧めたわけだ。

このように、17歳で稲村貫一郎に嫁いだ吟子は、父親・綾三郎の理解と友人・荻江の支援によって、10年後の1879年には、東京女子師範学校を首席で卒業することができたが、さあ、その先は？中国の賢賢の行動力もすごいが、吟子の行動力もすごい。彼女が成すべきことは、まず第1にツテをたどって、医大への女性初の入学を認めてもらうこと。次に、それが実現し私立医学校・好寿院を卒業した後は、更にツテをたどって、医術開業試験の受験を認めてもらうこと。父の綾三郎の理解と友人・荻江の支援を受けた後の本作中盤は、そんな舞台での吟子の奮闘ぶりをしっかり確認したい。しかして、吟子が医術開業試験の前期試験、後期試験で立て続けに合格し、湯島に診療所「産婦人科荻野医院」を開業したのは1885年、34歳の時だ。私が弁護士登録したのは1974年（25歳）、独立したのは1979年（30歳）だから、それより約100年も前のことになる。私は今でも独立した時の高揚した気持ちをハッキリ覚えているが、その時の気持ちは、きっと吟子も同じだったはずだ。

## ■□■この男との出会いが転機に！もし・・・だったら？■□■

私は30歳で独立した後、事務所維持のための一般民事刑事事件の処理だけでなく、大型公害訴訟に取り組み、さらに、日本環境会議の事務局の役割を担う等、弁護士の社会的役割を強く意識し、実践してきた。そして、その対象は、1984年の大阪駅前第2ビル研究会への参加以降は都市問題になっていった。

本作を観ていると、吟子が開設した産婦人科の診療所に、地元の娼婦たちが次々と診察にやって来たのは当然。その診察をしても儲からないのは仕方ないが、本作中盤では、吟子の医師としての義務の他、医師の社会的役割、とりわけ女医第1号としてのそれを強く意識していた吟子が、娼婦に代表される当時の弱い女性のための医療に全力を尽くす姿が描かれる。そんな吟子の大きな転機になったのは、13歳も年下の同志社大学の学生で、敬虔なキリスト教徒の青年・志方之善（山本耕史）との出会い。初対面時の志方の厚かましさには呆れるほかないが、それがイヤミにならず、逆にそれが結婚にまで至る長所にな

ってしまうのだから、男女の仲は面白い。しかも、志方の紹介で教会に赴いた吟子は、「男女の平等」を当然のものと説くキリスト教にたちまち帰依することに。これによって、女医第1号としての吟子が、医師としてのあるべき姿を求めて実践している日常業務には、キリスト教の教えという理論的武装が伴うことに。しかも、1891年の岐阜県濃尾大地震では、女子の孤児たちを保護するために立ち上がり、知的障害児教育の創始者となった石井亮一（山口馬木也）に賛同した吟子は、荻野医院を子供たちのために開放し、自らも孤児たちの世話をを行うまでに。

そんな吟子の姿を見ていると、34歳で開業した吟子が、30代の働き盛りをいかに懸命に生きてきたかがよくわかる。私の30代の頃の活動にだぶらせながらそんな姿を見ていると、思わず大粒の涙が溢れてくることに。

## ■□■この決断にビックリ！北海道行きの是非は？■□■

本作は文部科学省選定・カトリック中央協議会広報推薦の映画だから、教科書風のきれいごとで収める感じになっているのは仕方ない。そんな面が垣間見えたのは、吟子の診療所がヤクザ者の嫌がらせに遭うシークエンスだが、吟子の奮闘と志方の機転で、この程度の被害で済んだのはラッキー。しかし、その後、北海道の理想郷イマヌエルの開拓と、そこでのキリスト教布教のため、北海道行きの決心をした志方に吟子がどう向き合いかは難しいところだ。ところが、そこで吟子は意外にあっさりと荻野医院を廃業して、志方と共に北海道に渡ることを決断したから、私はビックリ。もちろん、北海道に渡っても吟子の医師としての仕事は続けられるが、その意味は全く違うはず。つまり、東京で第1号の女医としての実績を重ねていけば、医師会の会長は無理だとしても、少しずつ名前を挙げ、さまざまな要職に就くこともできるはず。そして、そのことは決して自分の立身出世のためではなく、医師を目指す後輩の女性たちの励みになるのだから、それは北海道で開拓する以上に意義があるのでは？私はそう考えてしまうが、なぜ吟子は志方と一緒に北海道へ行くことを決心した（できた）の？

志方に3年遅れて、1894年に43歳で北海道に渡った吟子は、1897年に46歳で北海道・瀬棚（現北海道函館市せたな町）で診療所を開業したが、1905年に志方が41才で病死したため、やむなく吟子は1890年に帰京し、医院を開業することに。しかし、その時点での吟子は、すでに57歳。すると、その後の女医第1号としての輝きは？そう考えると、北海道行きの是非は如何に？私はそう考えてしまうが、さてあなたの意見は？

## ■□■「一粒の麦」の意味と意義をしっかりと！■□■

本作のタイトルは本来「荻野吟子の生涯」でいいはずだが、それをサブタイトルとし、メインタイトルを「一粒の麦」としたのは、一体なぜ？それは、カトリック中央協議会の

推薦をもらうためという理由もあるが、吟子が歴史的に果たした役割をキリスト教的に理解するためという理由もある。「一粒の麦もし地に落ちて死なば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」は、『ヨハネ伝』の第12章24節にある有名な言葉だが、意外にも本作のストーリー展開の中にこの言葉は出てこない。キリスト教徒になった吟子の一番好きな「聖句」として登場するのは、『ヨハネ伝』第15章13節の「人その友の為に己の命をすつる 之より大いなる愛はなし」だ。

私はキリスト教徒ではないが、イエス・キリストの生涯は相当信じているので、本作の吟子や志方のようなキリスト教徒としての生き方を見ていると、相当納得し感動させられる。しかし、「人その友の為に己の命をすつる 之より大いなる愛はなし」は吟子が主観的に自分の生き方のよりどころとしてきた聖句であるのに対し、「一粒の麦もし地に落ちて死なば、ただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」は吟子が果たした役割を、後の第三者が客観的に評価した場合の聖句。そう考えると、本作のメインタイトルを「一粒の麦」とし、サブタイトルを「荻野吟子の生涯」としたことに、私は納得。

今年70歳を迎えた私は、2020年1月に71歳になる。大腸ガンと胃ガンを何とか克服できたという実感を持っている私としても、本作の吟子を見習って何らかの「一粒の麦」となれるよう、これからも頑張っていかなきゃ……。文部科学省推薦映画をじっくり観ると、評論も文部科学省推薦のような結論になることに、我ながらビックリ！

2019（令和元）年12月20日記